

特異的減感作療法中止時における 一般検査及びアレルギー検査所見

九段坂病院小児科 島 貫 金 男
山 崎 香 栄 子
下 田 恵 子
竹 村 尙 子

〔緒 言〕

昨年、特異的減感作療法の副作用についてアンケート調査を行い、その結果を報告した。

今回は、減感作療法中止時に実施した一般検査及び2, 3のアレルギー検査の結果について報告する。

〔対 象〕

当科において特異的減感作療法を行った気管支喘息症例のうち、1例を除き治癒または略治癒と判定し、治療を中止した69例を対象とした。1例は軽快例である。治療中止時の年齢は表1の如くである。

〔治療期間及び使用抗原〕

治療期間は2年ないし10年で平均4年8カ月であり、家塵抗原使用例が最も多く62例、真菌抗原23例、花粉抗原3例、その他3例であった。

〔結 果〕

〈末梢血液検査〉

赤血球数、血色素量ともに正常範囲にあり貧血を示した症例はなかった。

白血球数は63例中2例において若干正常値を下まわる数値を示したが、他は正常範囲内であった。

血小板数は大部分正常範囲内であったが、33例中2例は $40 \times 10^4 / \text{mm}^3$ 以上の値を示した。

表1 特異的減感作療法中止時の年齢

性別	年齢 (才)																			計
	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19						
男	1	2	1	6	7	5	3	3	3	7	5	3	1	1	48					
女	0	1	1	3	0	2	4	4	2	1	1	1	1	0	21					
計	1	3	2	9	7	7	7	7	5	8	6	4	2	1	69					

流血中好酸球は61例中31例において、 $500 / \text{mm}^3$ 以上の増多を示した。 $500 / \text{mm}^3$ 以下の症例の中にも塗沫標本で5%以上を示したものが約半数にみられ、61例中45例(73.8%)に好酸球増多が認められた。

〈生化学的検査〉

UV法による血清 GOT, GPT の測定を66例に実施したが、全例が当院における成人の正常範囲内であった。

LDH の測定は58例に実施したが、成人値に比し8例がやや高値を示した。

〈尿検査成績〉

59例において治療中止時に尿検査を行った。尿中蛋白陽性は6例(10.2%)にみられ、ウロビリノーゲン陽性4例(6.8%)、沈渣で1視野4コ以上赤血球の認められたものは56例中9例(16.1%)、白血球1視野5コ以上認められたものは5例(8.9%)であった。

尿検査で何等かの異常所見のみられたものは59例中16例(27.1%)であった。なお、このうち2例は治療前から微少血尿のあったものである。尿の異常所見と気管支喘息の重症度、治療期間との間には明らかな関係は認められなかった。

〈肺機能検査〉

Wright の Peak Flow Meter による肺機能検査の結果では、異常低値を男児2例に認めた。

末梢気道の状態を Flow-Volume 曲線から \dot{V}_{25} について検討してみると、29例中13例(44.8%)は正常児の80%以下であった。

〈アレルギー検査〉

減感作療法実施前と中止時における皮内反応の比較は表2の如くである。中止時の検査で反応の増強を示したものが55.4%にみられた。

表 2 特異的減感作療法実施前と中止時における皮内反応の比較 (n=53)

中止時 実施前	〜±	+	++	+++	計 (回数)
±	1	0	1	1	3
+	2	1	4	15	22
++	4	1	15	20	40
+++	0	0	3	6	9
計 (回数)	7	2	23	42	74

皮内反応 減弱 13.5%
不変 31.1%
増強 55.4%

血清 IgE 値は 58 例中 26 例 (44.8%) において 700 IU/ml 以上の値を示した。治療前に比較して低下傾向を示したものは 15 例中 10 例 (66.7%) であった。

血清 IgG は 54 例の全例において正常範囲内であった。13 例中 12 例は治療中止時の検査では増加の傾向を示した。

減感作療法中止時における RAST スコアは、表 3 の如くである。スコア 2 以上の値を示したものが 26 回の検査中 19 回 (73.1%) にみられた。

〔結 語〕

平均 4 年 8 カ月に亘る減感作療法実施例について、治療中止時に行った一般検査、アレルギー検査の結果を報告した。

減感作療法によると思われる明らかな障害は、少なく

表 3 特異的減感作療法中止時における RAST スコア (n=20)

抗原	スコア	3	2	1	0	計 (回数)
家 塵		13	3	0	1	17
真 菌		2	0	1	5	8
そ の 他		0	1	0	0	1
計 (回数)		15 (73.1%)	4	1	6	26

とも末梢血液検査、GOT、GPT、LDH などの生化学的検査では認められなかった。尿検査で 27% の症例において何等かの異常を認めたが、減感作療法との関係は明らかでなく、今後更に検討が必要である。

肺機能検査、アレルギー検査の結果は、臨床症状の消失後においても日常生活管理の必要性を示すものと考えられる。

〔文 献〕

- 1) 松村龍雄, 他: 小児気管支喘息の臨床検査成績, その 1, 血液像, 循環好酸球数, 赤沈, 副鼻腔レ線所見, 鼻汁, 喀痰内好酸球出現率その他について, アレルギー, 14: 376, 1965.
- 2) 荒田弘道, 他: Flow-Volume 曲線からみた小児気管支喘息の肺機能, 小児科臨床, 33: 713, 1980.
- 3) 荒井康男, 他: Wright ピークフロー値の検討, アレルギー, 31: 995, 1982.

食物性抗原の腸管よりの吸収に関する検討

国立相模原病院小児科 山 田 享
三 島 健

食物性抗原の腸管からの吸収は、低年齢ほど、胃腸管障害のある者ほど増大するとされている。我々は、食物アレルギー、中でも卵アレルギーを選らび、抗原としては、卵白に多く含まれている ovalbumin (以下 OA と略す) に着目した。そこで今回は、喘息児および授乳中の母親に生卵の経口負荷を行い、血清中、および母乳中に OA が検出できるか否かを検討した。同時に、OA に対する特異的 IgE、IgG 抗体も測定した。喘息児では、生卵負荷により、アレルギー症状が出現するか否か

を観察した。

〔対 象〕

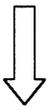
国立相模原病院小児科を受診中の 1 才から 11 才までの喘息児 23 名と、卵によると考えられたアトピー性皮膚炎を有する乳児の授乳中の母親 2 名である。今回、卵の負荷量が多いため、卵摂取により重篤な症状を呈すると考えられた児は除外した。

〔方 法〕

生卵の負荷量は、体重 20 kg 未満の者には 1 個、20 kg



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔緒言〕

昨年,特異的減感作療法の副作用についてアンケート調査を行い,その結果を報告した。

今回は,減感作療法中止時に実施した一般検査及び 2,3 のアレルギー検査の結果について報告する。